

恋愛に関する分析

—結婚の前段階として—

長守龍生

1. はじめに

戦後の日本の結婚は見合い結婚が中心であった。しかし 1960 年代に恋愛結婚が逆転して以降、日本における恋愛結婚の割合は増加の一途をたどり、2010 年では図 1 に示すとおり約 9 割が恋愛結婚となっている(小林 大崎 2016)。また、厚生労働省が行っている人口動態調査から得られた平均初婚年齢の推移を 5 年ごとにプロットしたものを図 2 に示す。1960 代後半に恋愛結婚が見合い結婚を逆転したこと、1970 年から男女ともに平均初婚年齢が上昇しそのまま現在に至ることが 2 つの図からわかる。これらのことを併せて考えると、恋愛結婚が主流となったことで平均初婚年齢が上昇したと推測できる。また晩婚化が進んでいる現代の日本社会において約 9 割が恋愛結婚ということを考えても、晩婚化における着目すべき根本的な問題は結婚の前段階とも捉えられる恋愛という部分にあるのではないだろうか。

本稿ではその結婚の前段階とも捉えられる恋愛に着目し、20 歳から 39 歳までの男女を対象に、恋愛に対する意識と、結婚に対する意識の関連の分析を行った後、男女間の恋人に求める条件の差異の分析を行う。そして最後に学歴間による恋人の有無、婚姻状況の差についても分析を試みる。本研究が恋愛によるアプローチから晩婚化や平均初婚年齢の上昇といった結婚に関する諸問題への対策のきっかけとなることを目的とする。

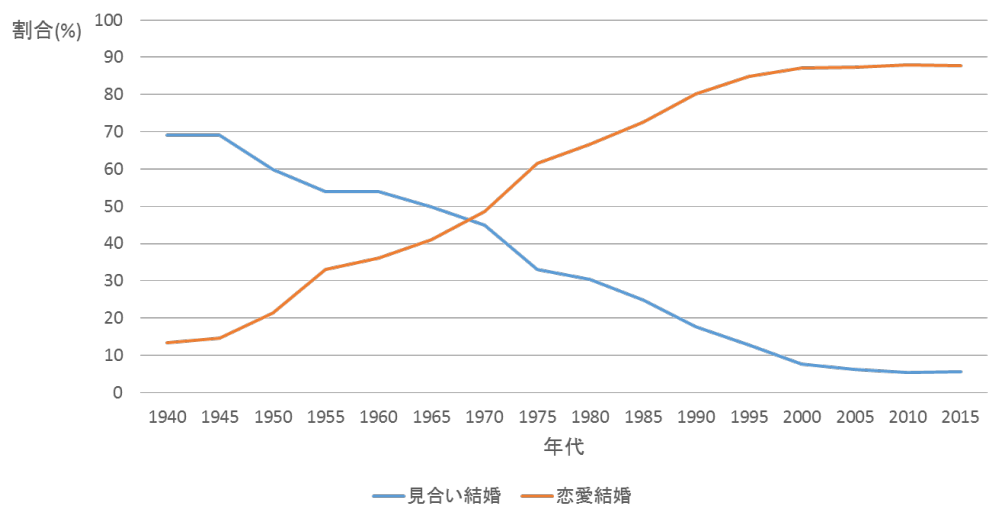


図1 見合い結婚と恋愛結婚の割合の推移

(出典)「第15回出生動向基本調査(結婚と出産に関する全国調査)」をもとに作成

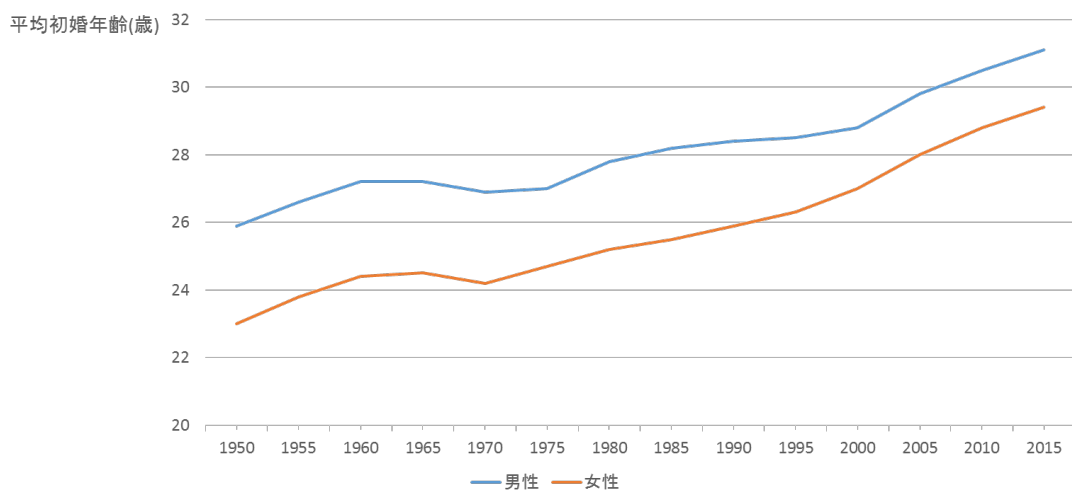


図2 平均初婚年齢の推移

(出典)「人口動態調査」をもとに作成

2. 先行研究

結婚ではなく恋愛という分野の研究となるとまだまだ未開の部分も大きいですが、少ないながらも明らかになっていることを以下に示す。

恋愛と結婚に関する研究としては、過去に交際経験のある人は、ない人に比べ、結婚するチャンスが有意に増える(小林 大崎 2016)という先行研究がある。また、交際経験以外にも、小中学校のころの友人関係や中学校時代の部活動などのようなソーシャルキャピタ

ルは交際人数に正の影響を与える(小林 2012)ということも明らかになっている。この結果は結婚に関する分析は行われていないが、先述した研究結果からも正に影響した交際人数は結婚についても正に影響しうることが示唆される。恋愛と結婚に加えて出産までにいたるメカニズムを分析した研究もある(小林 大崎 2016)。この研究では人々が出産にいたるまでには、「恋愛の壁」「結婚の壁」「出産の壁」という3つの壁を乗り越えなければならぬことを、前節で述べた見合い結婚が減少し、恋愛結婚が増加しているという結婚の仕方の変遷から提言している。

3. 仮説

本稿では3つの仮説を設定して分析を行う。仮説1として「恋人願望がない人は、結婚願望もない」を設定する。結婚の主流が見合い結婚から恋愛結婚に変化した現代では、先行研究の示すような、恋愛、結婚、出産という流れが存在することがうかがえる。しかし、ごくわずかとはいえ見合い結婚も残っている現代において全員必ずこのようなライフコースをたどるのだろうか。先行研究でこの一連の流れを裏付ける数値的データは見られなかった。恋愛は望まないが結婚は望む人、ないしは恋愛は望むが結婚は望まない人を想定して今回はこのような仮説を設定し分析を行う。

2つ目に「女性は男性に比べ、恋人に求める条件が厳しい」という仮説2を設定する。性別に着目したとき、女性は男性よりもより多くの条件を恋人に課す傾向がある(大森 2014)。この理由として、女性は20代後半からは結婚を見通したうえで恋愛をすることが挙げられている。一方男性は恋愛をする際に結婚まで見通すことが女性よりは少なく、結婚の見通しが立たなくとも「遊び」として恋愛を継続させる傾向があるようだ。したがって恋愛の機会が訪れた時に、結婚の条件を満たしているかどうかを踏まえて恋愛の選択をする女性と、とりあえず恋愛をし、結婚についての判断はしばらくしてから出すという男性では、男性のほうが恋愛に対するハードルは低いことが見込まれる。

3つ目として「学歴による恋人の有無、婚姻状況に差は見られない」という仮説3を設定する。性別と学歴に着目すると、女性は高学歴ほど、男性は低学歴ほど未婚率が高い(山田 1996)。学歴と結婚については、「学歴同類婚」という言葉もあるように男女の結婚に関する研究は数多く存在するが、恋愛という分野まで対象にした分析は少ない。先述したように交際人数に正の影響を与えるものはソーシャルキャピタルであり、教育や社会階層は影響を与えない。時系列的に後者を支持したときに、後方で分析が行われていなかった学歴と婚姻状況を分析することでより厚みのある分析になると考えこのような仮説を設定した。

4. 使用データと分析枠組み

4. 1 使用データ

今回の分析には東北大学教育学部が2016年7月から8月にわたって実施した「若年者のライフスタイルと意識に関する調査<2>」を使用する。本調査は日本全国の学生を除く20歳から39歳の男女を対象に実施した郵送調査である。計画サンプル数は200、有効回答数は145、回収率は72.5%であった。

4. 2 変数

本分析で用いる変数の説明を行う。仮説1については、回答者の婚姻状況と恋人の有無について尋ね、独身かつ恋人がいない人を対象に尋ねた「恋人願望」の回答結果をそのまま用いる。また結婚意欲については独身の方すべてを対象に行った「今後の結婚についての考え方」の結果から恋人がいる人を除外して分析に用いる。

仮説2については恋人がいない人を対象に尋ねた「恋人に求める条件」の回答を用いて分析を行う。具体的には、「性格・価値観があう」「人として尊敬できる」「勤務する会社や収入が安定している」「自分の仕事に対する理解がある」「夢や目標がある」「家事・育児に対する能力や姿勢がある」「収入が高い」「家庭第一である」「自分を束縛しない」「自分と年齢が釣り合う」「身長や容姿が好みである」「きちんとした家柄である」「学歴が高い」という13項目を設け、それぞれ「あてはまる」を1、「あてはまらない」を5とした5段階評価で回答を得た。分析では1と2を「あてはまる群」、3を「どちらでもない群」、4と5を「あてはまらない群」という3つのカテゴリに分類し、分析を行った。さらにこれらの数値を合計し新たに「恋人寛容度」という指標を作成し分析を行った。恋人寛容度が高いほど、相手に求める条件は少ない(緩い)という解釈を行う。

仮説3の分析には仮説1と同じ質問項目から対象者を「恋人なし」「恋人あり」「既婚」の3つのグループに分ける。また学歴の指標として、回答者の最終学歴を尋ねた質問項目を利用する。なお、質問の時点では8つの選択肢を設けたが、分析を行う上では、教育年数を考慮し、最終学歴を「中学」「高校」「短大・高専」「大学・大学院」の4つのカテゴリに分類し、分析を行った。

4. 3 分析枠組み

まず、仮説1においては恋人がいないと回答した人のみを対象に、恋人願望と結婚意欲のクロス集計表を作成した。その結果該当者が5を下回るセルが見られたため、検定にはフィッシャーの直接検定を用いた。

仮説 2 に関しては、性格・価値観、尊敬、収入安定、仕事理解、目標・夢、家事育児、高収入、家庭第一、自由度、年齢、容姿、家柄、学歴の 13 項目の数値を合計し、新たに「恋人寛容度」を作成する。この恋人寛容度が大きければ大きいほど恋人に求める条件は少ないということである。この分析では t 検定を用いて恋人寛容度を男女間で比較した。この分析に関しても、恋人の条件という分析の意図から、分析対象を恋人のいない男女に絞って行う。さらに追加分析として、男女間で有意差が見られた場合は、有意差を生み出している質問項目を明らかにすべく、すべての項目において各質問項目と性別を用いたクロス集計表を作成し、男女間で有意差があるかを調べた。検定方法は分析結果の各セル内の数値に応じて、適宜カイ 2 乗検定とフィッシャーの直接検定を使い分けて行う。

仮説 3 についても仮説 1 と同様、学歴と恋人の有無でクロス集計表を作成する。この分析においては全員を対象に行い、既婚者は「既婚」とする。さらに仮説 2 で男女による差がある可能性が示唆されたため、全体の分析を行った後、仮説 3 についても男女別の分析を試みた。

5. 分析結果

5. 1 基礎分析

まず今回に分析に関する基礎分析を図 3 に示す。図 3 は今回の調査の回答者の婚姻状況と恋人の有無についてまとめたものになる。サンプルサイズが 145、恋人がいる人が 49 人で全体の 33.79%、恋人のいない人が 18 人で全体の 12.41%、既婚者が 78 人で全体の 53.79%であった。

5. 2 仮説 1 の検証

表 1 は恋人願望と結婚意欲のクロス集計表である。5 以下のセルが見られるため、フィッシャーの直接検定を行った結果、有意確率.000 であることから恋人願望の有無が結婚意欲の有無に影響を与えていることがわかった。恋人がいない人で恋人願望がない人は 32.7%で、そのうち 62.5%の人は結婚意欲もないことがわかった。このことから仮説 1 はおおむね支持されたといえる。なお $\phi = .567$ であった。

表 1 恋人願望と結婚意欲のクロス集計表

		結婚意欲		合計
		いずれ結婚するつもり	一生結婚しない	
恋人願望	願望あり	30 (61.2)	3 (6.1)	33 (67.3)
	願望なし	6 (12.2)	10 (20.4)	16 (32.7)
合計		36 (73.5)	13 (26.5)	49 (100)

注：ℳ内は% $\phi = .567$ 有意確率.000

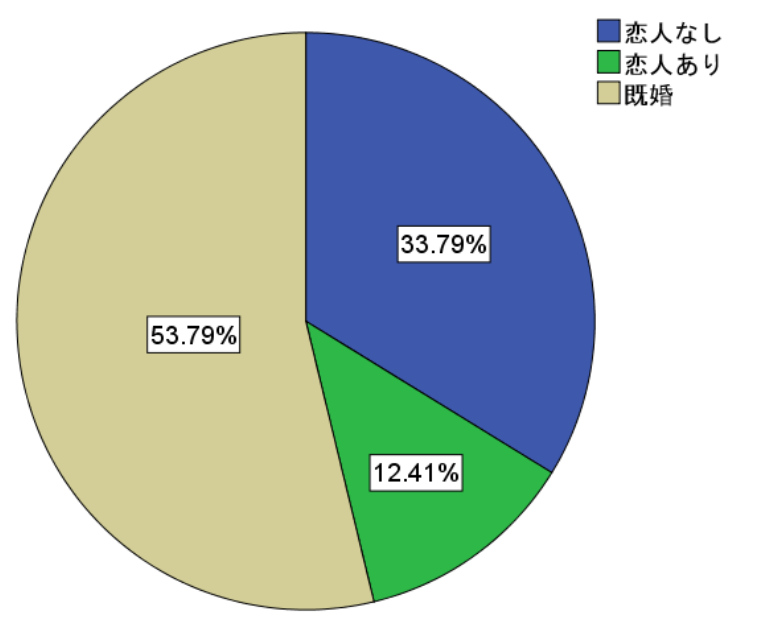


図 3 婚姻状況と恋人の有無

5. 3 仮説 2 の検証

続いて仮説 2 の検証に移る。恋人寛容度を算出し、男女間の差異を見るために t 検定を行った結果、有意確率.002 で恋人寛容度において 6.746 男女間に有意な平均値の差が見られた。男女別の平均得点を見ると、男性が 35.22、女性が 28.48 となっており、男性のほうが女性より恋人寛容度が高い、つまり女性のほうが恋人に求める条件は厳しいものであることがわかった。仮説 2 は支持されたとと言えるだろう。

次に各質問項目に着目して、恋人寛容度において男女差を生み出している要因の分析結果を示す。性別とそれぞれの質問項目でクロス集計表を作成し、カイ 2 乗検定ないしはフィッシャーの直接検定を行ったところ男女間で有意差が見られたのは「収入安定」「仕事理解」「目標・夢」「高収入」「年齢」「家柄」の質問項目であった。このうち「仕事理解」は男性のほうがより恋人には強く求める傾向にあるが、その他の項目については、女性のほうが恋人により強く求める傾向であることがわかった。男女間で有意差が見られたものについては以下の表 2 から表 7 に示す。

表 2 性別と「収入安定」のクロス集計表

	収入安定			合計
	あてはまる群	どちらともいえない群	あてはまらない群	
男性	11	10	6	27
女性	18	2	1	21
合計	29	12	7	48

注：有意確率.00673325 CramerのV .456

表 3 性別と「仕事理解」のクロス集計表

	仕事理解			合計
	あてはまる群	どちらともいえない群	あてはまらない群	
男性	22	3	2	27
女性	12	9	0	21
合計	34	12	2	48

注：有意確率.0127966 CramerのV .390

表 4 性別と「目標・夢」のクロス集計表

	目標・夢			合計
	あてはまる群	どちらともいえない群	あてはまらない群	
男性	11	8	8	27
女性	8	13	0	21
合計	19	21	8	48

注：有意確率.00820695 CramerのV .434

表 5 性別と「高収入」のクロス集計表

	高収入			合計
	あてはまる群	どちらともいえない群	あてはまらない群	
男性	4	14	9	27
女性	16	3	2	21
合計	20	17	11	48

注：有意確率.000068615 CramerのV .618

表 6 性別と「年齢」のクロス集計表

	年齢			合計
	あてはまる群	どちらともいえない群	あてはまらない群	
男性	4	8	15	27
女性	11	3	7	21
合計	15	11	22	48

注：有意確率.0244560 CramerのV .404

表 7 性別と「家柄」のクロス集計表

	家柄			合計
	あてはまる群	どちらともいえない群	あてはまらない群	
男性	3	7	17	27
女性	11	4	6	21
合計	14	11	23	48

注：有意確率.00552577 CramerのV .458

表 8 学歴と婚姻状況、恋人の有無のクロス集計表

	中学	高校	短大・高専	大学・大学院	合計
恋人なし	4 (57.1)	23 (39.7)	9 (25.7)	12 (27.3)	48 (33.3)
恋人あり	1 (4.3)	8 (3.8)	4 (1.4)	5 (1.4)	18 (2.5)
既婚	2 (28.6)	27 (46.6)	22 (62.9)	27 (61.4)	78 (54.2)
合計	7 (100)	58 (100)	35 (100)	44 (100)	144 (100)

注：ℳ内は% 有意確率 .440

表 9 性別と婚姻状況、恋人の有無のクロス集計表

	性別		
	男性	女性	合計
恋人なし	28 (50.0)	21 (23.6)	49 (33.8)
恋人あり	7 (12.5)	11 (12.4)	18 (12.4)
既婚	21 (31.7)	57 (64.0)	78 (53.8)
合計	56 (100)	89 (100)	145 (100)

注：()内は% 有意確率 .003 CramerのV .283

5. 4 仮説 3 の検証

表 8 は学歴と婚姻状況、恋人の有無のクロス集計表である。フィッシャーの直接検定の結果、有意確率は.440 と学歴間の有意差は見られなかった。仮説 2 で男女間に恋人寛容度の有意差が見られたことから、男女で分けて分析も試みてみたが、男女ともフィッシャーの直接検定の結果、有意にはならなかった。したがって男女ともに学歴間による婚姻状況、恋人の有無に差は見られず、仮説 3 も支持されたといえよう。

しかし男女間の婚姻状況と恋人の有無を比較してみると、仮説 2 より女性のほうが厳しい条件を課す傾向にあることがわかったが、男性の 50%は恋人なしで女性の 64.8%が既婚であることがわかった。そこで一度学歴を無視し、性別と婚姻状況、恋人の有無でクロス集計表を作成し表 9 に示した。フィッシャーの直接検定の結果、有意確率.003 で性別による婚姻状況や恋人の有無の違いがあることがわかった。

6. 考察

仮説 1 の「恋人願望がない人は、結婚願望もない」が支持されたことによって先行研究で示された恋愛、結婚、出産という現代の日本のライフスタイルが確実性を増すものになった。仮説 2 の先行研究では男性は女性ほど結婚を見通して恋愛をすることはないとあったが恋愛をする時点で結婚意欲は持っていることが示唆された。

仮説 2 では男女間で恋人に求める条件の厳しさに差があることがわかった。「仕事理解」では男性のほうが、「収入安定」「目標・夢」「高収入」「年齢」「家柄」では女性のほうがより強く恋人に求める傾向があることがわかった。しかし、この結果から単純に女性のほうが、条件が厳しいと決めつけるのは一概にはできないように思われる。日本では男は仕事、女は家事育児といった性別役割分業的思想がある。近年の女性の社会進出や男女平等の思想の広がりによって、このような固定観念は薄れつつあるが、出産や育児といった女性特有のライフコースやそれに伴う社会のメカニズム(賃金や収益率などがよい例である)といった点ではやはり性別による差はやむを得ない部分も存在するように思われる。今回の分析で女性が男性より厳しい条件を求めることが明らかになった背景にはこのような理由が

ある可能性を考慮しなければならない。

仮説 3 では学歴は婚姻状況や恋人の有無に差をもたらさないことがわかった。先行研究で対立していた理論であったが小林(2012)を支持する形となった。しかし追加分析で明らかになった性別間で、婚姻状況や恋人の有無に有意差が生じた点についてはまだまだ議論の余地を残すこととなった。

7. おわりに

本稿では結婚の前段階である恋愛に関する分析を行った。分析の結果として結婚や出産というイベントを見据える上では恋愛は避けて通るのが難しいイベントであるのは間違いないだろう。結婚に関する研究のみならず、今後恋愛という分野の研究にも注目したい。最後に述べた分析では、性別による婚姻状況や恋人の有無に有意差が見られる結果となった。端的にいうと、男性は独身、女性は既婚といった性差が見られた。もしこの結果が正しいならば、性別による婚姻状況や恋人の有無に格差があると認めざるを得ないが、この点については分析方法を改善し、より正確な分析を行う必要がある。

【文献】

小林盾, 2012, 「恋愛の壁, 結婚の壁——ソーシャル・キャピタルの役割——」『成蹊人文研究』 47, 157-164.

小林盾, 大崎裕子, 2016, 「恋愛経験は結婚の前提条件か : 2015 年家族形成とキャリア形成についての全国調査による量的分析」『成蹊人文研究』 24, 1-15.

大森美佐, 2014, 「若者たちにとって「恋愛」とは何か——フォーカス・グループディスカッションによる分析から——」『家族研究年報』 39, 109-127.

白波瀬佐和子, 1999, 「階級・階層, 結婚とジェンダー——結婚に至る階層結合パターン——」『理論と方法』 14(1):5-18

山田昌弘, 1996, 『結婚の社会学——未婚化・晩婚化はつづくのか——』丸善ライブラリー.